

**【QLife漢方】
がん治療における
漢方薬の処方状況に関する医師調査
結果報告書**

平成25年11月1日

株式会社QLife(キューライフ)

調査の背景

ここ数年、漢方薬の効能について科学的・医学的解明が進み、「エビデンスに基づいた医薬品」としての認知が広がっている。特にがん領域においてはその傾向が顕著であり、実際に処方例も増加しているようであるが、その理由や実態についてはあまり明らかではない。そこでQLifeでは、がん治療に携わる医師を対象に、漢方薬処方の実態について調査した。

主な結論

約2/3のがん治療医(年間20例以上の治療)が、がん治療の副作用軽減目的で漢方薬を処方したことがあり、うち半数は「3年前に比べて処方する漢方薬の数が増えた」と使用パターンの幅が広がっていた。また「今後、処方に漢方薬が占める割合は増加する」と考える医師は4割で、逆に「減る」と考える医師は1割に届かない。この背景には、臨床現場において西洋薬だけでは限界を感じたり、漢方薬の効果に関するエビデンスが増加していることがある。また患者から漢方薬について質問されることも3年前に比べて増加傾向にあるようだ。しかしながら、今後の処方増加には「エビデンス不足」が障害となるとする医師も少なくない。

結論の概要

- 1) 約2/3のがん治療医が、がん治療において漢方薬を処方したことがある。
うち半数が「3年前と比べて処方する漢方薬の数が増加」している。
「手足のしびれ」「吐気・嘔吐」「食欲不振」「倦怠感・疲れ」の副作用軽減を目的に処方されるケースが多く、「牛車腎気丸」「補中益気湯」「六君子湯」が主に処方されている。
- 2) 約1/4のがん治療医が、患者から漢方薬の処方について質問された経験がある。
- 3) 4割のがん治療医が、漢方薬が処方に占める割合が「増える」と考えている。
主な理由は「西洋薬のみの治療で限界を感じる」「エビデンス情報が増えている」。

【調査実施概要】

▼調査主体

株式会社QLife(キューライフ)

▼実施概要

- (1) 調査対象: 年間20例以上のがん治療をしている医師
- (2) 有効回収数: 159人
- (3) 調査方法: インターネット調査
- (4) 調査時期: 2013/10/21 ~ 2013/10/23

▼有効回答者の属性

(1) 年代:

年代	男性	女性	n
40代	86	26	112
50代	39	3	42
60代	4	0	4
70代以上	1	0	1
総計	130	29	159

年代	男性	女性	%
40代	66.2%	89.7%	70.4%
50代	30.0%	10.3%	26.4%
60代	3.1%	0.0%	2.5%
70代以上	0.8%	0.0%	0.6%
総計	100.0%	100.0%	100.0%

(2) 居住地:

北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県
4.4%	1.3%	0.0%	3.1%	0.6%	1.3%	0.0%	1.3%	1.9%	1.3%
埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	新潟県	富山県	石川県	福井県	山梨県	長野県
0.6%	2.5%	12.6%	2.5%	2.5%	1.3%	3.1%	0.0%	0.0%	1.9%
岐阜県	静岡県	愛知県	三重県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県
1.9%	3.8%	5.0%	1.3%	1.3%	5.7%	8.8%	1.9%	1.3%	1.3%
鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県
0.6%	0.0%	1.9%	5.7%	0.6%	0.0%	1.3%	1.9%	1.3%	8.2%
佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県			
0.0%	0.6%	1.3%	0.6%	0.0%	1.9%	0.0%			

(3) 施設規模

	n	%
診療所	11	6.9%
病院(がん診療連携拠点病院以外)	57	35.9%
病院(がん診療連携拠点病院)	91	57.2%
その他	0	0.0%
総計	159	100.0%

(4) 診療科目

n=159

	n	%
消化器外科	36	22.6%
一般外科	16	10.1%
泌尿器科	16	10.1%
放射線科	15	9.4%
消化器内科	11	6.9%
血液内科	9	5.7%
麻酔科・ペインクリニック	8	5.0%
呼吸器内科	7	4.4%
総合診療科	6	3.8%
呼吸器外科	6	3.8%
耳鼻咽喉科・頭頸部外科	5	3.1%
婦人科・女性診療科	5	3.1%
神経内科	3	1.9%
腫瘍内科	2	1.3%
脳神経外科	2	1.3%
小児科・新生児科	2	1.3%
精神科・神経科・心療内科	2	1.3%
循環器内科	1	0.6%
内分泌内科	1	0.6%
代謝内科	1	0.6%
腎臓内科・人工透析科	1	0.6%
緩和医療・ホスピス	1	0.6%
整形外科	1	0.6%
形成外科・美容外科	1	0.6%
皮膚科	1	0.6%
糖尿病内科	0	0.0%
膠原病内科	0	0.0%
感染症科	0	0.0%
老年科	0	0.0%
健診・検診	0	0.0%
胸部外科	0	0.0%
心臓血管外科	0	0.0%
腎臓外科	0	0.0%
小児外科	0	0.0%
移植外科	0	0.0%
外傷外科	0	0.0%
救命救急科(ER)	0	0.0%
眼科	0	0.0%
産科	0	0.0%
総数	159	100.0%

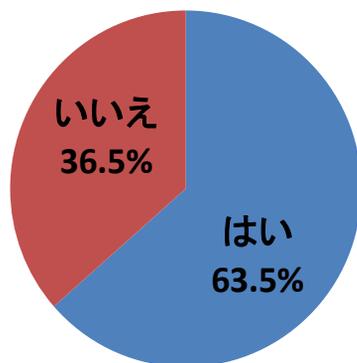
【Q1】直近3年間において、がん治療(手術、抗がん剤治療、放射線治療、緩和療法)の副作用軽減を目的に、漢方薬を処方したことがありますか。

63.5%すなわち約3人に2人のがん治療医が、がん治療の副作用軽減を目的とした漢方薬を処方していた。

n=159

	n	%
はい	101	63.5%
いいえ	58	36.5%
総数	159	100.0%

がん治療の副作用軽減のため
漢方薬を処方したことがあるか



n=159

【Q2】(がん治療の副作用軽減を目的に漢方薬を処方したことがあると回答した医師のみ)
漢方薬を使用した症例の、がん種別をすべて教えてください。(複数回答)

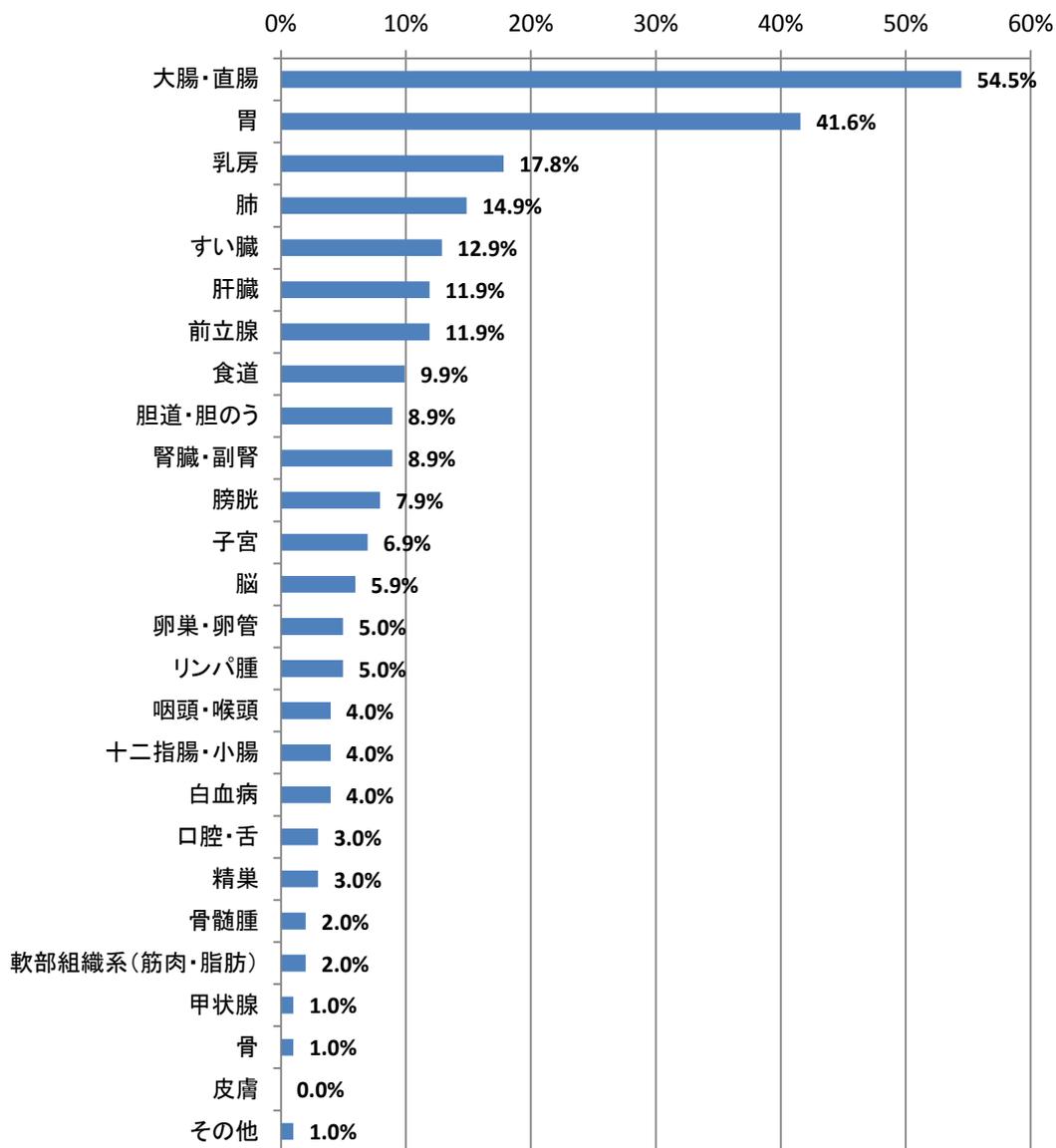
「大腸・直腸がん」が最も多く、次いで「胃」となっており、消化器系のがんで漢方薬処方の実績が多い。

n=101

	n	%
大腸・直腸	55	54.5%
胃	42	41.6%
乳房	18	17.8%
肺	15	14.9%
すい臓	13	12.9%
肝臓	12	11.9%
前立腺	12	11.9%
食道	10	9.9%
胆道・胆のう	9	8.9%
腎臓・副腎	9	8.9%
膀胱	8	7.9%
子宮	7	6.9%
脳	6	5.9%
卵巣・卵管	5	5.0%
リンパ腫	5	5.0%
咽頭・喉頭	4	4.0%
十二指腸・小腸	4	4.0%
白血病	4	4.0%
口腔・舌	3	3.0%
精巣	3	3.0%
骨髄腫	2	2.0%
軟部組織系(筋肉・脂肪)	2	2.0%
甲状腺	1	1.0%
骨	1	1.0%
皮膚	0	0.0%
その他	1	1.0%
総数	101	248.9%

【Q2】漢方薬を使用した症例の、がん種別をすべて教えてください。(複数回答)(つづき)

漢方薬を使用したがんの種別(複数回答)



n=101

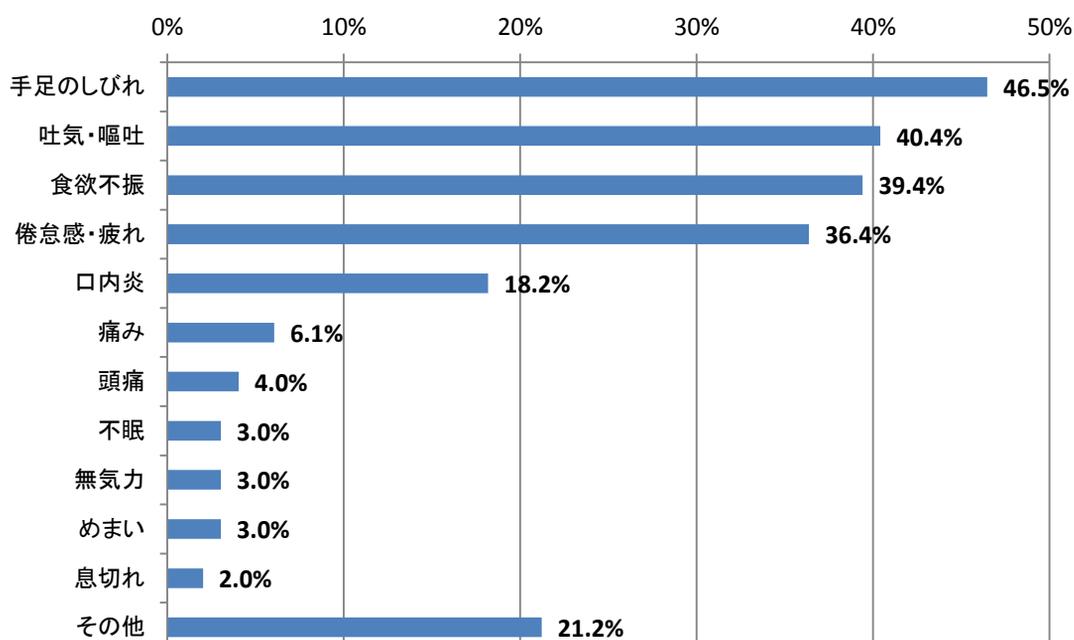
**【Q3】(がん治療の副作用軽減を目的に漢方薬を処方したことがあると回答した人のみ)
漢方薬はどの副作用を軽減させるために処方しましたか。(複数回答)**

「手足のしびれ」「吐気・嘔吐」「食欲不振」「倦怠感・疲れ」の4つの症状に対して漢方薬が処方されるケースが多い。次いで「口内炎」「痛み」となった。その他では、「下痢」「便秘」「腸管運動不全」などの消化器系の副作用が多く挙げられた。

n=101

	n	%
手足のしびれ	46	46.5%
吐気・嘔吐	40	40.4%
食欲不振	39	39.4%
倦怠感・疲れ	36	36.4%
口内炎	18	18.2%
痛み	6	6.1%
頭痛	4	4.0%
不眠	3	3.0%
無気力	3	3.0%
めまい	3	3.0%
息切れ	2	2.0%
その他	21	21.2%
小計	99	223.2%
覚えていない・分からない(排他)	2	2.0%
総数	101	

どの副作用軽減のために処方したか(複数回答)



n=99

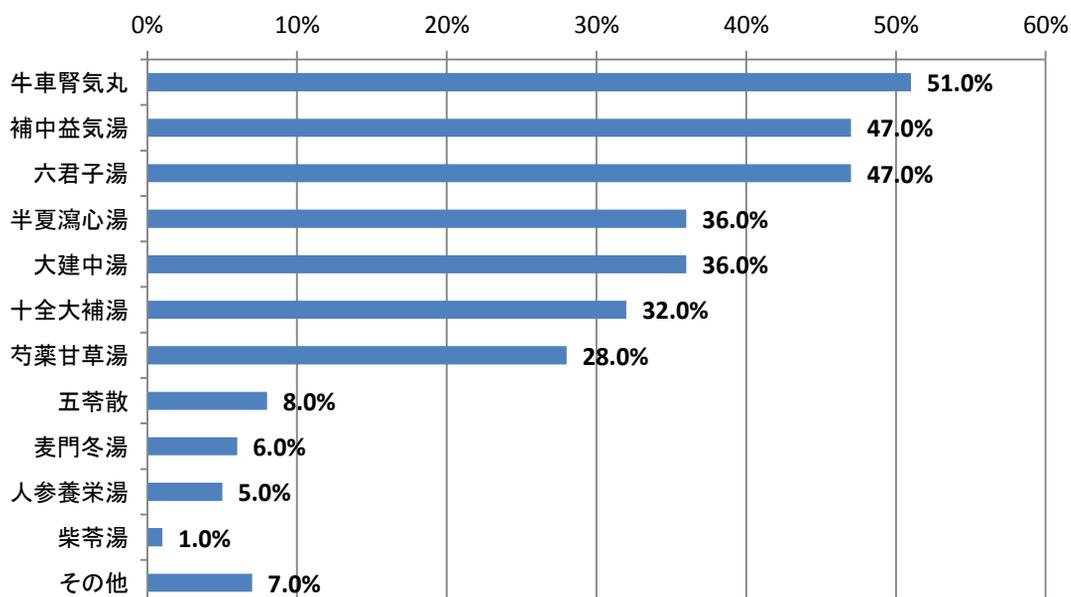
【Q4】(がん治療の副作用軽減を目的に漢方薬を処方したことがあると回答した医師のみ)
 がん治療の副作用を軽減するために処方した漢方薬の名前を教えてください。(複数回答)

がん治療医が具体的に処方する漢方薬は「牛車腎気丸」が最も多く、次いで「補中益気湯」「六君子湯」の順となった。

n=101

	n	%
牛車腎気丸	51	51.0%
補中益気湯	47	47.0%
六君子湯	47	47.0%
半夏瀉心湯	36	36.0%
大建中湯	36	36.0%
十全大補湯	32	32.0%
芍薬甘草湯	28	28.0%
五苓散	8	8.0%
麦門冬湯	6	6.0%
人参養栄湯	5	5.0%
柴苓湯	1	1.0%
その他	7	7.0%
小計	100	304.0%
覚えていない・分からない(排他)	1	1.0%
総数	101	

処方した漢方薬(複数回答)



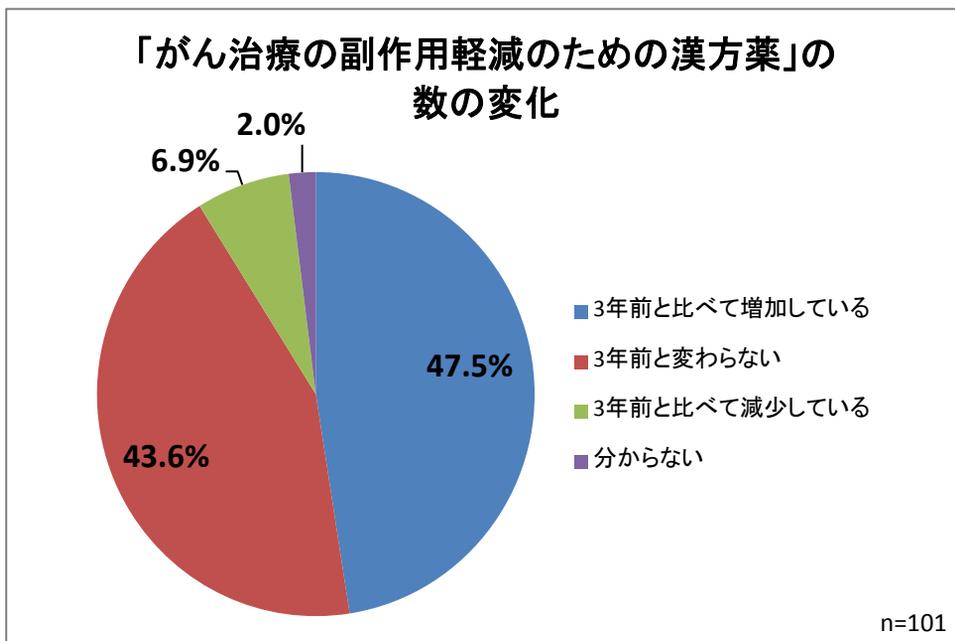
n=100

【Q5】(がん治療の副作用軽減を目的に漢方薬を処方したことがあると回答した医師のみ)
直近3年間で、あなたが処方した「がん治療の副作用軽減のための漢方薬」の数は、どのように変化していますか。

漢方薬を処方しているがん治療医に直近3年間の処方動向を聞いたところ、47.5%すなわち半数近くが「3年前と比べて、処方する漢方薬の数は増加している」と回答。「減少している」医師は6.9%にとどまり、処方パターンの幅が広がっていることが伺える。

n=101

	n	%
3年前と比べて増加している	48	47.5%
3年前と変わらない	44	43.6%
3年前と比べて減少している	7	6.9%
分からない	2	2.0%
総数	101	100.0%



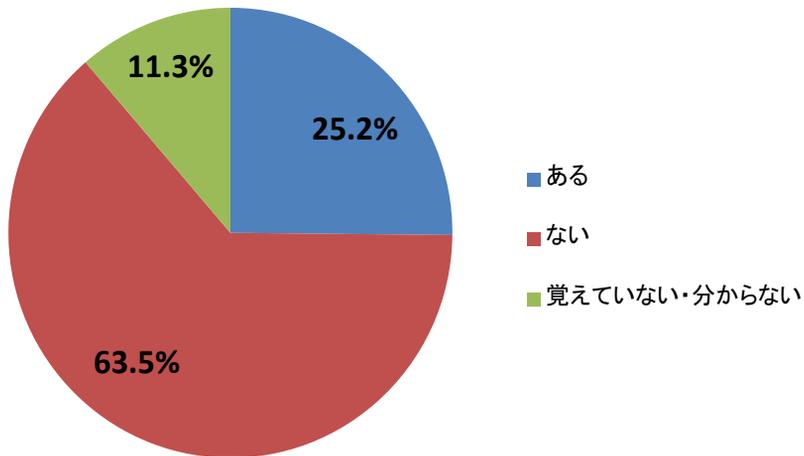
【Q6】患者さんや家族から、がん治療の副作用軽減のために「漢方薬の処方が可能か」という質問をされたことはありますか。

患者からの漢方薬処方に関する質問の有無については、25.2%すなわち4人に1人のがん治療医が「ある」と回答した。

n=159

	n	%
ある	40	25.2%
ない	101	63.5%
覚えていない・分からない	18	11.3%
総数	159	100.0%

患者や家族からがん治療の副作用軽減のために
「漢方薬が処方可能か」質問されたことはあるか



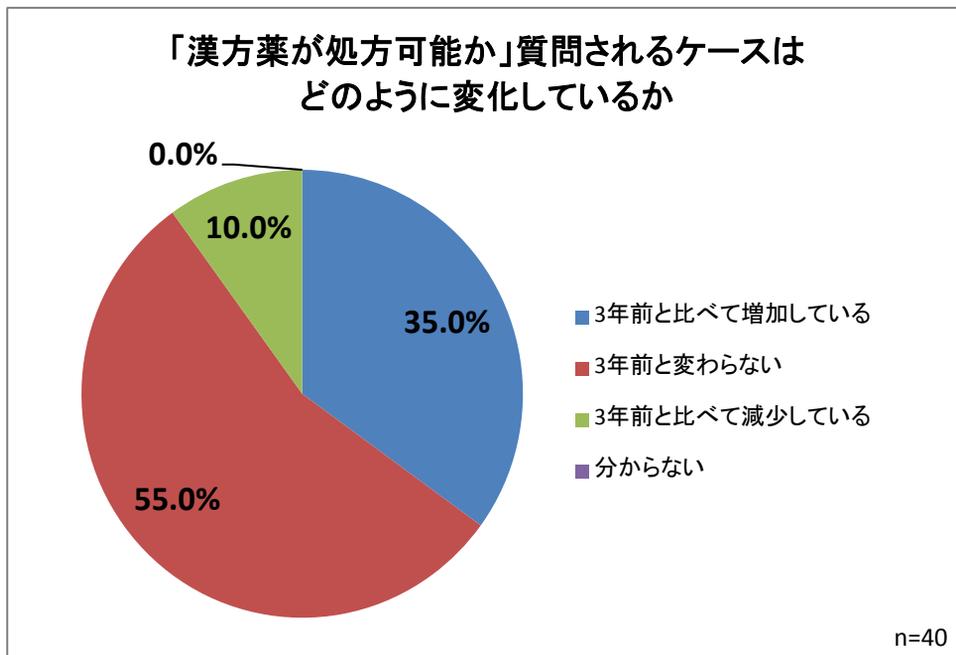
n=159

【Q7】(「漢方薬の処方が可能か」と質問されたことがあると回答した医師のみ)
直近3年間で、患者さんや家族から「漢方薬の処方が可能か」という質問を受けるケースは、どのように変化していますか。

35%が「3年前と比べて増加している」と回答。「減少している」は10%にとどまった。

n=40

	n	%
3年前と比べて増加している	14	35.0%
3年前と変わらない	22	55.0%
3年前と比べて減少している	4	10.0%
分からない	0	0.0%
総数	40	100.0%



【Q8】患者から、漢方薬や漢方薬処方について質問されて困ったことがありますか。困ったときのエピソードを具体的に教えてください。

患者から質問されて困ったことがあるがん治療医は少なくなかった。具体的には、大きく分けて「漢方薬全般情報」「服薬」「効果・副作用」の3種類の内容が、質問されて困ったケースとして挙げられた。以下に実際のコメントを抜粋する。

【全般情報について】

- ・レベルの高いエビデンスが無いので答えに窮してしまう
- ・知らない漢方薬のことを聞かれた
- ・患者が他院で処方されたと持ってきた漢方薬の効果や目的がわからない

【服薬について】

- ・飲みやすい飲み方を聞かれた
- ・苦いといわれて困った

【効果・副作用について】

- ・(漢方薬の)副作用はないと思っている患者さんが多いこと
- ・(漢方薬の)副作用の有無を聞かれた
- ・飲んでも全く変わらないと言われた
- ・どれくらい効果があるのか聞かれた

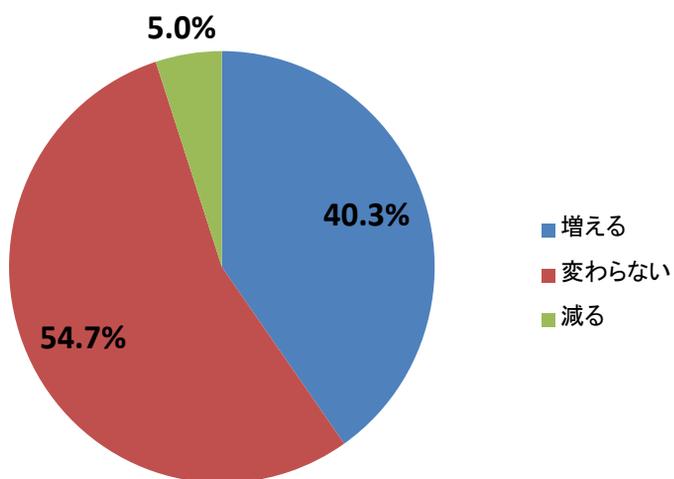
【Q9】今後、あなたが行う「がん治療の副作用軽減を目的とした処方」の中で漢方薬が占める割合はどう変化するとお考えですか。

がん治療医の40.3%が「漢方薬が占める割合が増える」と回答し、「減る」と考えるのは5.0%であった。

n=159

	n	%
増える	64	40.3%
変わらない	87	54.7%
減る	8	5.0%
総数	159	100.0%

「がん治療の副作用軽減を目的とした処方」の中で漢方薬が占める割合は今後どう変化するというか



n=159

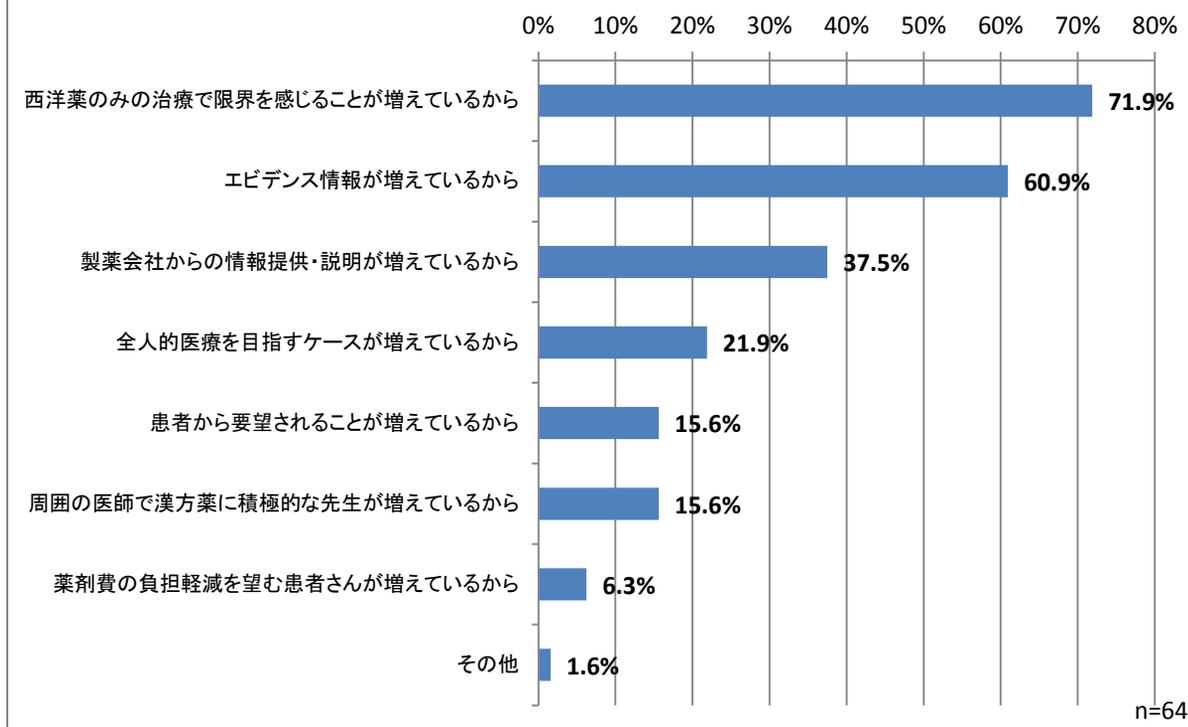
【Q10】(「がん治療の副作用軽減を目的とした処方」の中で漢方薬が占める割合が増えると回答した人のみ)今後、あなたの漢方薬処方が「増える」と考える理由を教えてください。(複数回答)

漢方薬処方が増える理由としては、「西洋薬のみの治療で限界を感じるが増えているから」(71.9%)、「エビデンス情報が増えているから」(60.9%)を挙げたがん治療医が多かった。

n=64

	n	%
西洋薬のみの治療で限界を感じるが増えているから	46	71.9%
エビデンス情報が増えているから	39	60.9%
製薬会社からの情報提供・説明が増えているから	24	37.5%
全人的医療を目指すケースが増えているから	14	21.9%
患者から要望されることが増えているから	10	15.6%
周囲の医師で漢方薬に積極的な先生が増えているから	10	15.6%
薬剤費の負担軽減を望む患者さんが増えているから	4	6.3%
その他	1	1.6%
総数	64	231.3%

漢方薬処方が増えると考え理由(複数回答)



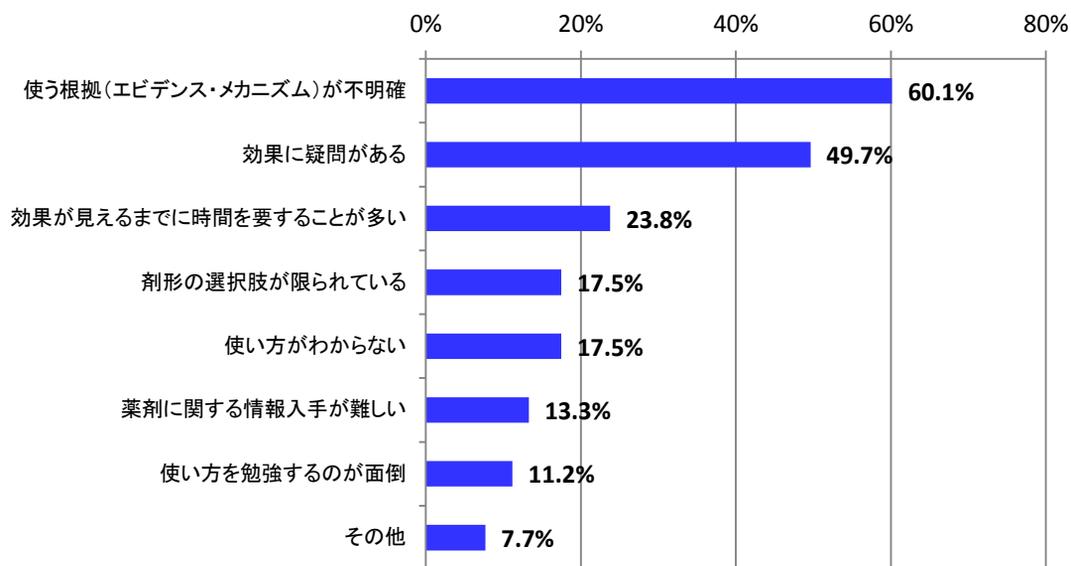
【Q11】「がん治療の副作用軽減のため、漢方薬の処方を増やす」際の障害は何ですか。(複数回答)

漢方薬処方を増やすことへの障害を複数回答してもらったところ、「使う根拠(エビデンス・メカニズム)が不明確」(60.1%)、「効果に疑問がある」(49.7%)などが主に挙げられた。

n=159

	n	%
使う根拠(エビデンス・メカニズム)が不明確	86	60.1%
効果に疑問がある	71	49.7%
効果が見えるまでに時間を要することが多い	34	23.8%
剤形の選択肢が限られている	25	17.5%
使い方がわからない	25	17.5%
薬剤に関する情報入手が難しい	19	13.3%
使い方を勉強するのが面倒	16	11.2%
その他	11	7.7%
小計	143	200.7%
障害はない(排除)	16	10.1%
総数	159	

漢方薬処方を増やす際の障害(複数回答)



n=143

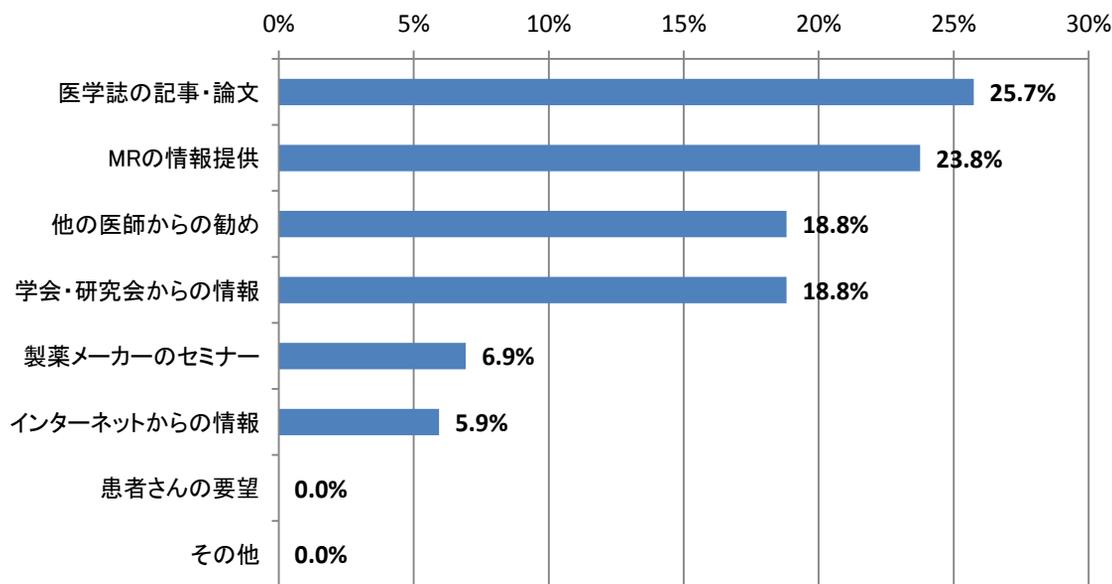
【Q12】(がん治療の副作用軽減を目的に漢方薬を処方したことがあると回答した医師のみ)
 あなたが「がん治療の副作用軽減のため漢方薬処方」を行うことについて、一番影響を与えている情報源は何ですか。

最も影響を与えている情報源は「医学誌の記事・論文」(25.7%)で、次いで「MRの情報提供」(23.8%)、「他の医師からの勧め」「学会・研究会からの情報」(ともに18.8%)であった。

n=101

	n	%
医学誌の記事・論文	26	25.7%
MRの情報提供	24	23.8%
他の医師からの勧め	19	18.8%
学会・研究会からの情報	19	18.8%
製薬メーカーのセミナー	7	6.9%
インターネットからの情報	6	6.9%
患者さんの要望	0	0.0%
その他	0	0.0%
総数	101	100.0%

漢方薬処方に最も影響を与えている情報源



n=101

本調査に関するお問い合わせ先:

株式会社QLife 広報担当 田中 智貴
TEL : 03-3500-3235 / E-mail : info@qlife.co.jp

<株式会社QLifeの会社概要>

会社名 : 株式会社QLife(キューライフ)
所在地 : 〒100-0014 東京都千代田区永田町2-13-1 ボッシュビル赤坂7F
代表者 : 代表取締役 山内善行
設立日 : 2006年(平成18年)11月17日
事業内容 : 健康・医療分野の広告メディア事業ならびにマーケティング事業
企業理念 : 医療と生活者の距離を縮める
サイト理念 : 感動をシェアしよう!
URL : <http://www.qlife.co.jp/>
